

2023年6月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

500hPa 高度をみると、高緯度で波列状の偏差パターンとなり、カナダ北東部、ヨーロッパ北部、東シベリアで正偏差、グリーンランド、西シベリア、オホーツク海～ベーリング海で負偏差となった。日本の南東海上で正偏差、北太平洋東部～北大西洋の中緯度帯では帯状に負偏差となった。200hPa 風速をみると、亜熱帯ジェット気流は平年の位置と比べて、アフリカ～東アジアでは南寄り、日本の東海上では北寄りを流れた。北米～北大西洋の偏西風は、平年の位置と比べて南寄りを流れた。海面気圧をみると、カナダ北東部、ヨーロッパ北部で正偏差、北大西洋南部、北極海、オホーツク海～ベーリング海で負偏差となった。日本の南東海上では正偏差、日本の北では負偏差となった。850hPa 気温をみると、カナダ、ヨーロッパ北西部、東シベリア西部で高温偏差、ロシア西部、ベーリング海峡、米国の西海上で低温偏差となった。

熱帯の対流活動は、平年と比べて、北西太平洋熱帯域、北大西洋東部～アフリカの北緯10度帯で活発、インド洋、南西太平洋熱帯域、中米、南米で不活発だった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、月の前半にアフリカ～インド洋を東進し、その後不明瞭になった。対流圏上層では、インド洋で南北半球対の低気圧性循環偏差、アフリカで南北半球対の高気圧性循環偏差が見られた。対流圏下層では、アラビア海～インドでアジアモンスーンに伴う西風が平年と比べて弱かった。フィリピンの東では低気圧性循環偏差が見られた。海面気圧は、熱帯域では、インド洋～北太平洋

の広い範囲で正偏差、東部太平洋～北大西洋で負偏差となった。南方振動指数は+0.5だった。

世界の天候

世界の月平均気温偏差は+0.51°C(速報値)で、1891年の統計開始以降、2022年を上回り6月として最も高い値となった。6月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.73°C/100年(速報値)である。

主な異常天候発生地域は次のとおり。

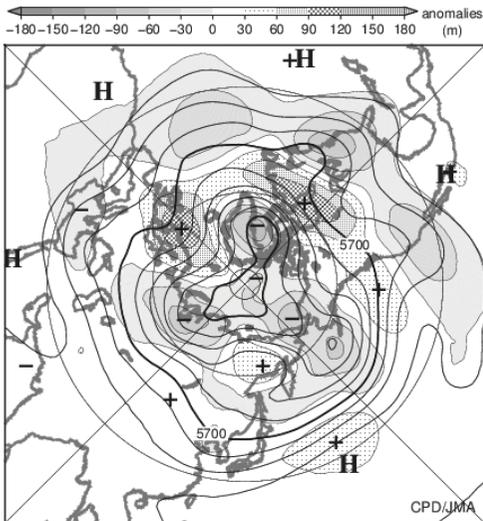
- 東シベリア南部～東アジア東部、東南アジア、中国北西部～中央アジア南部、インド北東部～南部、ヨーロッパ北西部～西アフリカ中部、カナダ南部、ブラジル北部～中米中部、南米西部、オーストラリア北東部で異常高温となった。
- パキスタン中部～インド北西部、中央アジア南西部～中東北部、中東西部、地中海周辺で異常多雨、中央アジア南東部～ロシア西部、ヨーロッパ東部、ヨーロッパ中部、カナダ北東部、オーストラリア東部及びその周辺で異常少雨となった。

(気象庁 大気海洋部 気候情報課)

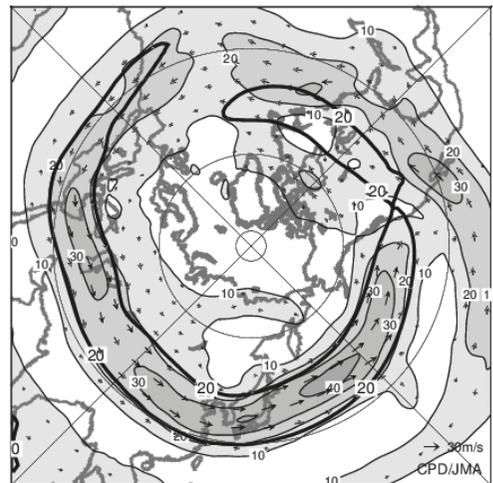
※ 特に断りのない限り、1991～2020年平均値を気候平均値として記述しています。

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

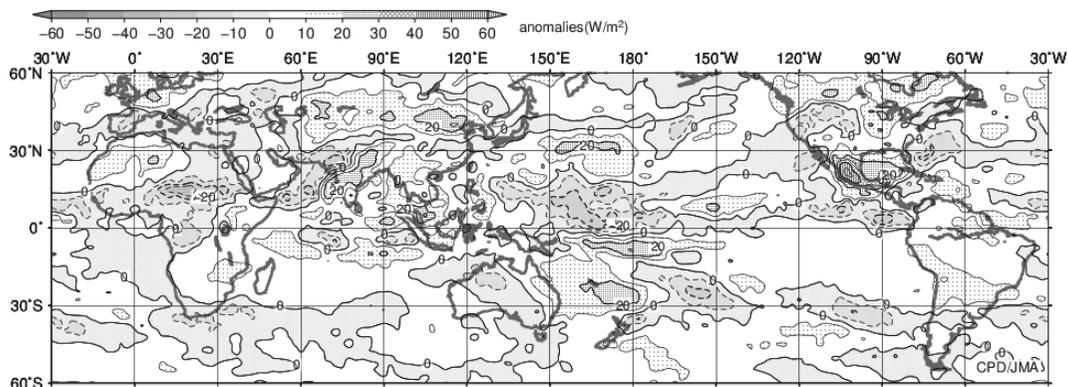
<https://www.data.jma.go.jp/cpd/diag/sokuho/index.html>



2023年6月の北半球月平均500hPa 高度及び
 年偏差
 等値線間隔は60m。陰影は年偏差。年偏差は
 1991～2020年の平均値。

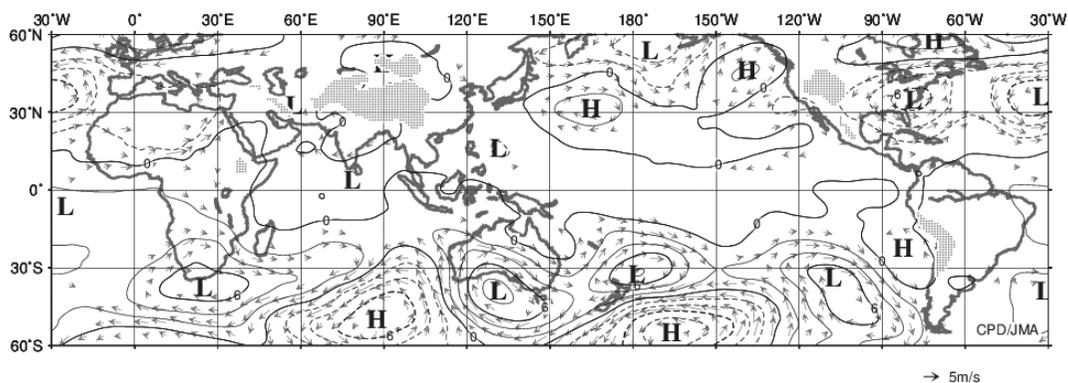


2023年6月の北半球月平均200hPa 風速及び
 風ベクトル
 等値線間隔は10m/s。太実線は平年の風速で等
 値線間隔は20m/s。年偏差は1991～2020年の平均値。



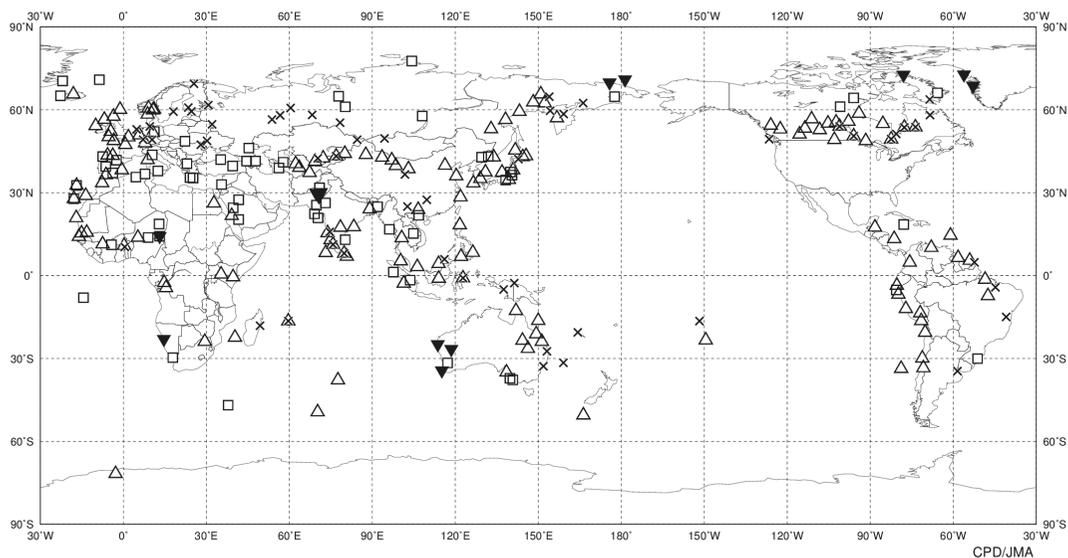
2023年6月の月平均外向き長波放射量年偏差

等値線間隔は 10W/m^2 で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。米国海洋大気庁 (NOAA) より提供されたデータを用いて作成。年偏差は1991~2020年の平均値。



2023年6月の月平均850hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル

流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6\text{m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1991~2020年の平均値。



2023年6月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨
異常高温・低温は標準偏差の1.83倍を超える場合、異常多雨・少雨は降水5分位値が6及び0。